

北極はだれのもの



ロシア・ハバロフスク市在住

岡田 和也

前号本欄で触れました今年3月1日にスタートした『国際極年2007-2008』の枠内でロシアが実施している最大の探検調査のひとつは、ロシアの10以上の研究機関と一連の外国の学術センターの研究者が参加している『アールクチカ（北極地方）2007』と呼ばれるものですが、この夏、その第一段階で、ロシアの2艇の深海調査用有人潜水艇『ミール1』と『ミール2』が、北氷洋の海底の北極点に到達し、それぞれ水深4,261メートルと4,302メートルの地点におよそ1時間停留してチタン製のロシア国旗を海底に立てたのち、8時間以上かかって海面に浮上しました。

北極南極研究所のイヴァーン・フロロフ所長の話しによりますと、その探検調査には、1億ルーブリ（およそ5億円）が費やされたということです。また、国際海洋法協会のメンバーであるイリーナ・ミーヒナさんは、「ロシアは、北氷洋の底が大陸およびロシアの延長線上にあることを世界ではじめて証明しようとしており、それが証明されれば、ロシアは、大陸棚のきわめて豊富な石油産地を開発する主権を得ます」と述べました。すると、8月13日付のロシアの新聞『イズヴェースチヤ』に「北極地方の地下資源をめぐる争いに、アメリカ、デンマーク、カナダ、さらにはオーストラリア

が加わった」という見出しの記事が掲載されました。その記事によりますと、8月12日、Lomrogと呼ばれるデンマークの北極探検調査がスタートしました。Lomrogとは、Lomonosov Ridge off Greenland（グリーンランドの岸辺のロモノソフ海嶺）の略称で、デンマークは、その海底山脈が自国に属するグリーンランドの延長線上にあることを証明しようとしています。こうして、デンマークは、ロシアとカナダに続いて、北極の領有を正式に主張する3番目の国家となりました。アメリカも、北極はアメリカ領アラスカとつながっていると声明しており、今のところ国連海洋法条約に調印していないため北極にたいする権利を主張することはできないとはいえ、ほどなく自分のカードを切るものとみられます。また、ノルウェイ、アイスランド、フィンランド、スウェーデンもそれぞれの権利を主張するものとみられ、中国、アイルランド、さらにはオーストラリアまで、“北極のパイ”の分け前に与りたい意向をすでに表明しているそうです。その記事には、第3次世界大戦という事態進展の最悪のシナリオも描かれていました。レニングラードのバルト造船所で建造されたソ連の原子力砕氷船『アールクチカ』号が1977年8月17日に北極航海史上はじめて北極点に到達してから今



新聞『イズヴェースチヤ』(2007年8月10日付)に掲載された北極調査に関する記事（写真は、上が、北氷洋の海底に立てられたロシア国旗、下が、そこでの調査が大陸棚にたいするロシアの権利を根拠づけるためのかぎとなる地点に疑問符を印した地図）

年でちょうど30年になりますが、北極をめぐる最近の動きをマスコミ報道で追っていますと、なんとなく、はてしない欲望に精神をむしばまれて自ら滅びてしまう人間の切なさや儚さをしみじみと描いたロシアの文豪レーフ・トルストイの『人にはどれほどの土地があるか』という民話が思い出されてまいります。

【訂正】前号本欄の写真解説文中『セーヴェルヌイ・ポーリュス（極海）』を『セーヴェルヌイ・ポーリュス（北極）』に訂正させていただきます。